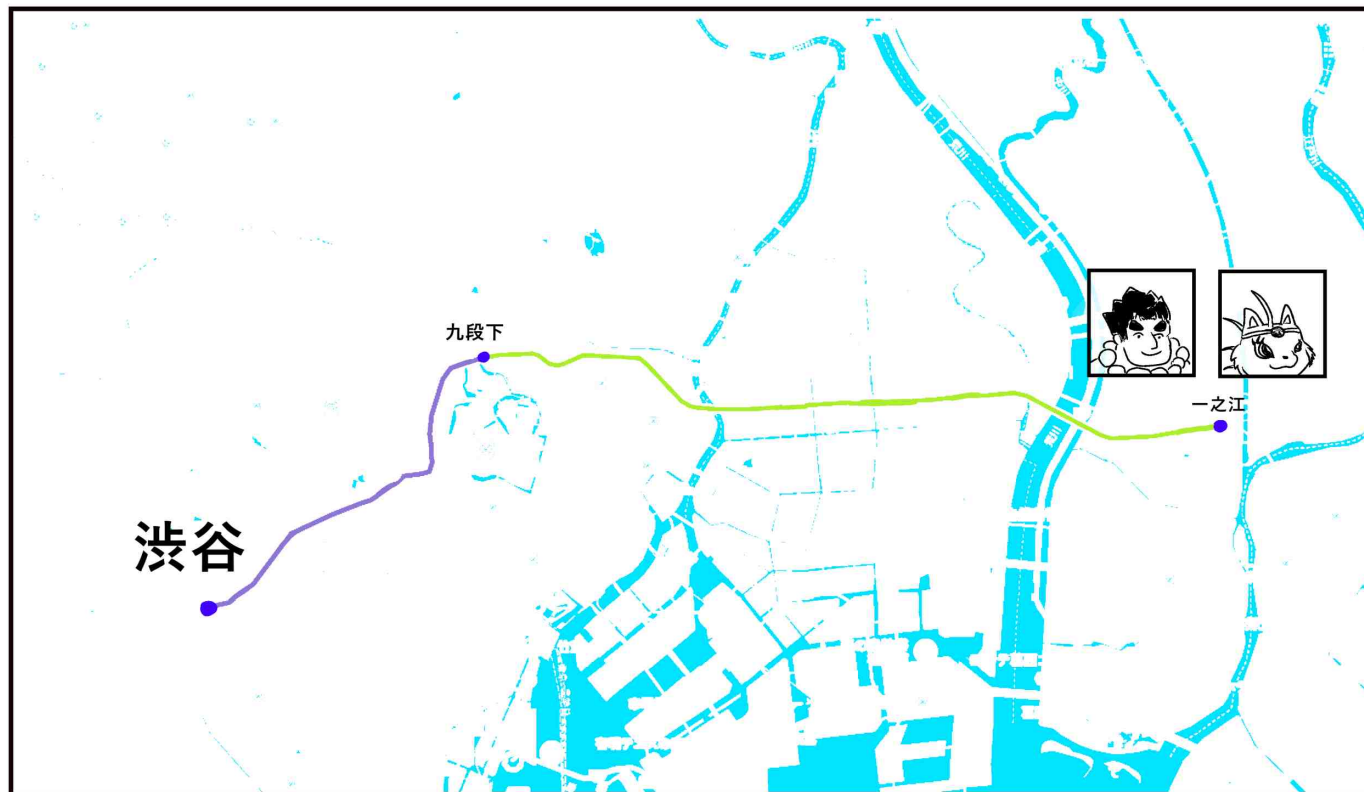




邂逅の章

「この前のさー、
変身した子…覚えてる？」

「うん」

「『おまえらも』
ゲート開けるのか
って言ってたよね？」

「ん…言ってたわね」

「それってさ、
あの子もゲート開ける
ってことだよね」

「まーそうなるんじゃ
ないかしらね」





「こんなところを何組も通ってくんだもの…
できるのが私たちだけってこと、ないでしょ」

「うーん…そうだね…
あたしも最初はウワサ通り
やってみただけだし…

誰にもメークかけずに
稼げて楽しいなんて
サイコーと思ってたのにさー。

まさか困る人がいるとか
考えてもなかったし？

結局なんで敵って
言われたかも
わかんないけど？

…って聞してる？
なんでかなあ」



「ん…
あの子が
バカだから
じゃない？」

「もう、いい加減だなあ…」

「だって判断材料が
ないんだもの。」

情報が足りないから
こうやって様子見に
来てるんじゃない…」

ビットバレー
ここは**渋谷**と
称されるだけあって
IT関連会社のオフィスが多い。

その関係かどうかは定かではないが
デジモンと一緒に行動している
人の姿も多いようだ。

だが、他のデジモンを
意識する素振りの人は居ないし
進む方向や年齢層に
法則性を見出すこともできない。

そもそも、パートナー関係なのか
怪しい雰囲気との組み合わせも多い。

迂闊に声をかけて
藪蛇になるのも困るということで
収穫は今のところゼロだ。

「ただ、口ぶりからしても
あの子がひとりでゲートを開いて
動いているように思えないし…
組織だてて動いているはず。

それに、合意の上で連れてきたのなら
みんな帰りたがるのはおかしいのよね。

…早合点はよくないけれど。
理由はいったい何なのかしら…？」

「あっ、ねえねえアレ！
面白そうなの来たよ」

「何よ今度は…
ってアレは
確かに面白いわね」



「やった…
やっと地上に
出られた」

「なんなのよ
この駅～…」



「アタシもう疲れて
来ちゃった…」

半蔵門線の改札口から
このA8出口までくるだけでも
渋谷初心者のススムには
重労働だった。

ここからナンパをしかけるのは
なかなか辛いぞ。

というか、そもそも
同年代くらいの女の子が
思ってたよりいない気がする。

「ねえねえ、キミ」

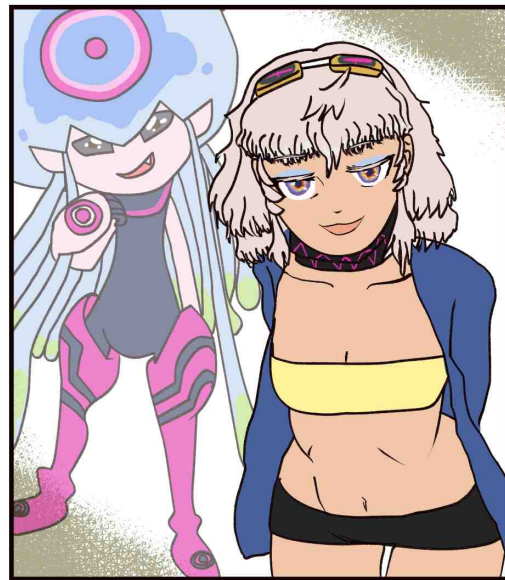
……

なんと都合の
良いことか。

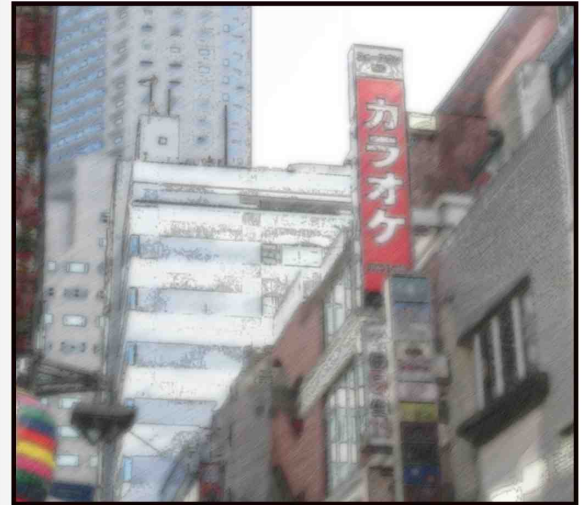
それらしい子が
向こうから声を
かけてきてくれた。

「気になっちゃてさー…

よかったら、
あたしたちと
ちょっと
話さない？」



彼女に連れられ、
少々離れた場所にある
カラオケにススムたちは
入っていた。



「白昼堂々と実体化して
歩いてるからびっくり
しちゃったわ」

「ジェリーモンがコレの操作
知っててよかったね～」

どういう仕組みか不明だが、
装置で彼女がチュパモンを
半透明にしてくれていた。

言われてみると
電車に乗ったときあたりから
妙に注目されていた
気がしてくる。

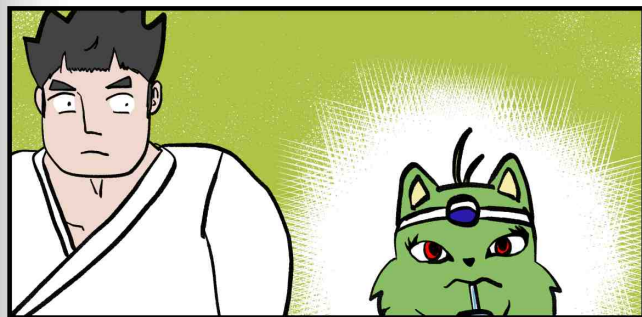


「でも、堂々としてたから
逆によかったのかもね」

「いやあ助かりましたよ、
なんせコイツは
産まれたときから
こうだったもんで…。

コレが普通なのかと…」

「へえ、**デジタマ**のときから
一緒なの？」



「なに、そのデジタマって」

「あれっ…
知らなかったの？」

デジモンが生まれる前の姿よ、
見た目はフツーにタマゴを
想像してくれたらいいわ」

「ふーん」

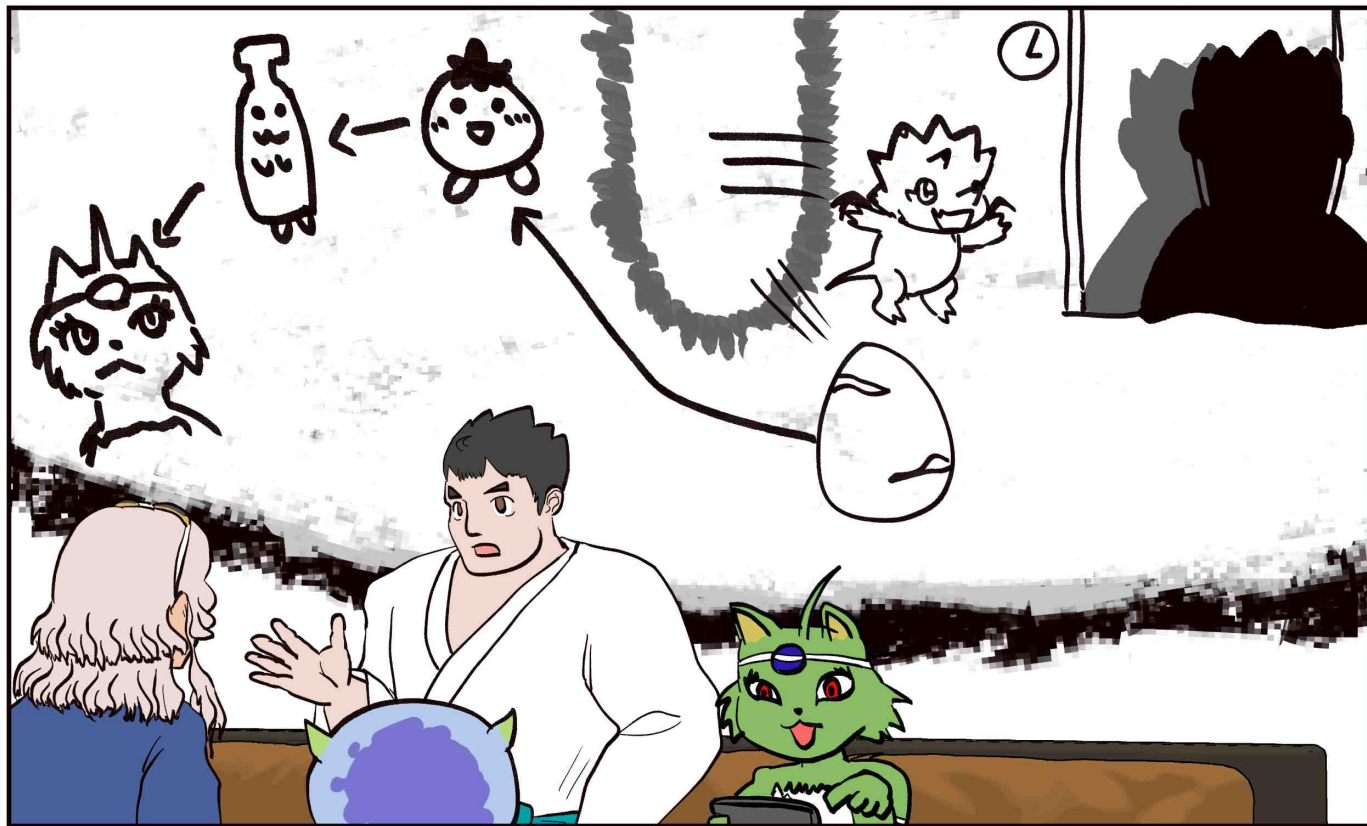
「現実世界の生き物のタマゴと
仕組みが違うからわざわざ
そう呼んでるのかしらね」

「デジモンはデジタマから
産まれるけれど、
デジタマを産むことはなくて…
死んだら勝手に
デジタマに還るのよ。
そんなことを繰り返していて…
まあ、だから親とか子とか
そういうのないの私たち」

「へー。
…って**そんなこと**より
その子のデジタマの話
聞かせてよ」

「そんなことって
聞いといて、もう…」

「はは…それじゃ…」



「ふーん、
こっちで産まれたから
初めから階層が
合ってるってわけね…」

「え、どういうこと？」

「もう、どうせ途中で
あなた飽きちゃうじゃない…
三度目はないわよ」

「ごめーん」

「それにしても…
聞いたことないけど、
フシギなことも
あるものね？」

「ガンマモンは
そのときのこと
何か言ってたかしら？」

「んー…覚えてないって
言ってたんだよなー」

「転がってきたとか？
本人は覚えてないの？」

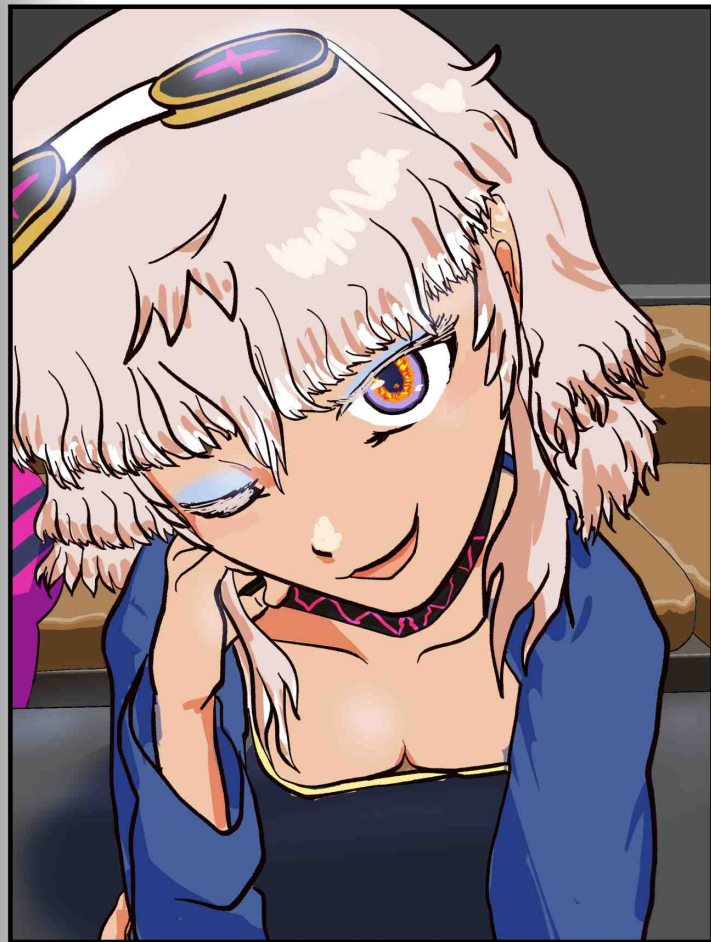
「アタシ産まれてないし…」

「あっ、そっか」

「あたしとしてはー？
おんなじウワサ試してた子と
たまたまこんなトコで
であったコトの方が
フシギだと思うけどなー。
なんだか、
運命感じちゃうね？」

「ね？」

「はは…
そっ…そうですね…」



「ってかさー
なんか固くない？
フツーに話そ？
たぶんタメか、
そっちのが上だし？

あっ、そうそう…
いろいろ聞いといて
あたし名乗っても
なかったよね。

サラキアだよ。
サラキア・ヴァンツェッタ、
キアでいいよ。
中三ね！
キミは？」

すごい圧だ。

自分の半分くらいしか
体積がなさそうな
小柄な子が相手なのに、
完全に気圧されて
ススムはドギマギしていた。

「楠神煤夢です」

いかん。
つい「固い」まま
喋ってしまった。

「…オホン」

「オレも中三だからタメだな」

「オッケー
ススムねー」

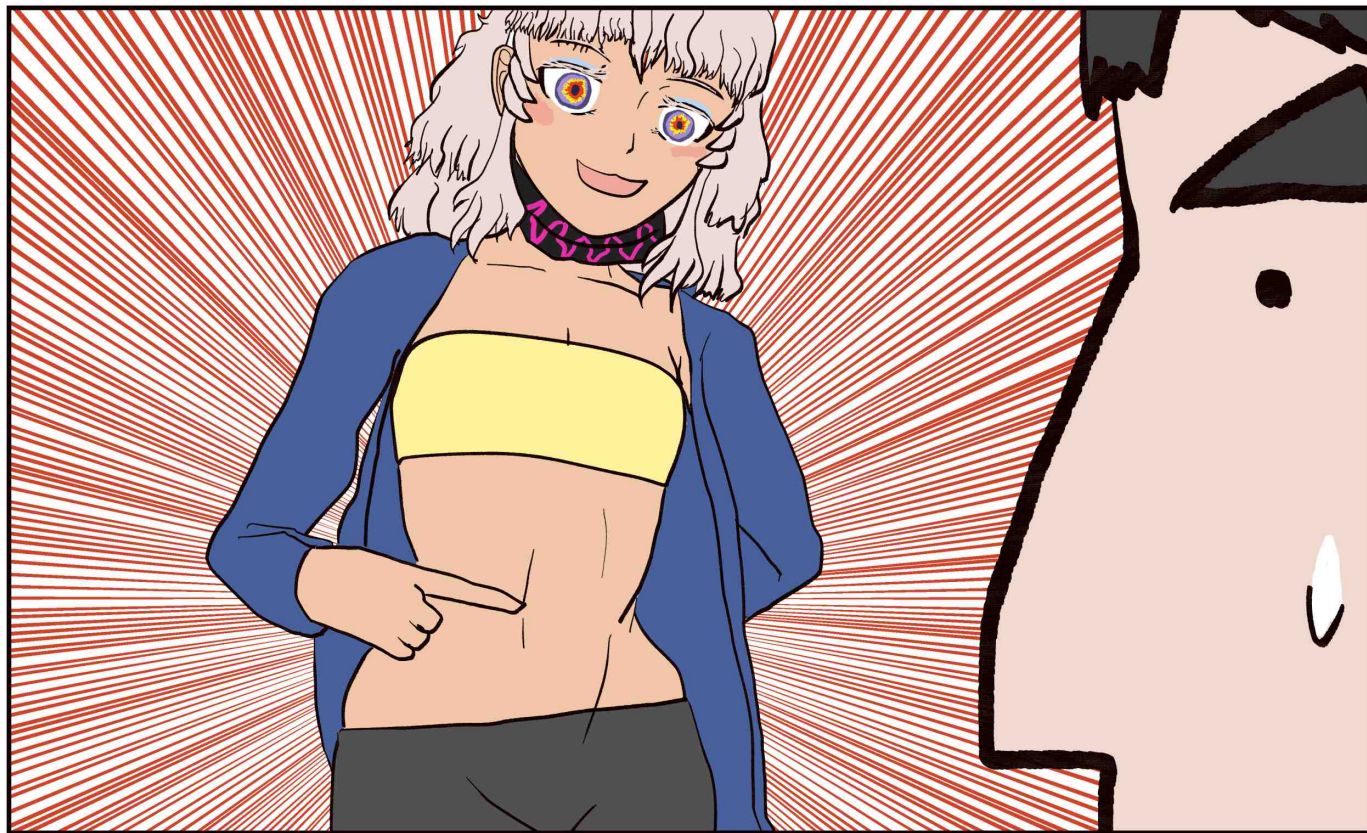
「よろしく、キア」

うむ。
なんとか持ち直したぞ。
このまま圧されっぱなしは
よろしくない。

「ねね、それでさ
ススムに見せたいモノ
あるんだけど
いいかな？」

「いいぜ、なんでもこいだ」

「そこなくっちゃ〜」



「ここ！パンチして！」
「……え？」

ちょっとアクセル全開すぎて
いよいよ追いつけていない。

「はー…**バカなの？**
せめて説明を
先にしなさいよ」

…と、ジェリーモンが
助け舟を出してくれた。

「この子ね、お腹叩かれると
デジタルゲートを開けるのよ。
ワケわかんないと思うけど」

「そうそう」

「はあ、なるほど??」

「おんなじウワサを試して
ゲート開いたんだから、
ススムもできそうな
気がするのよねー。

だからまずは
あたしから証拠
見せようかなって」

「うーん…そんなわけ…
ないとも言えないわね
たしかに」

「でしょー」

「というわけだから
一発！おねがい！」

「アノー…なんか後で
高額の請求とかされたり
しませんよね？」

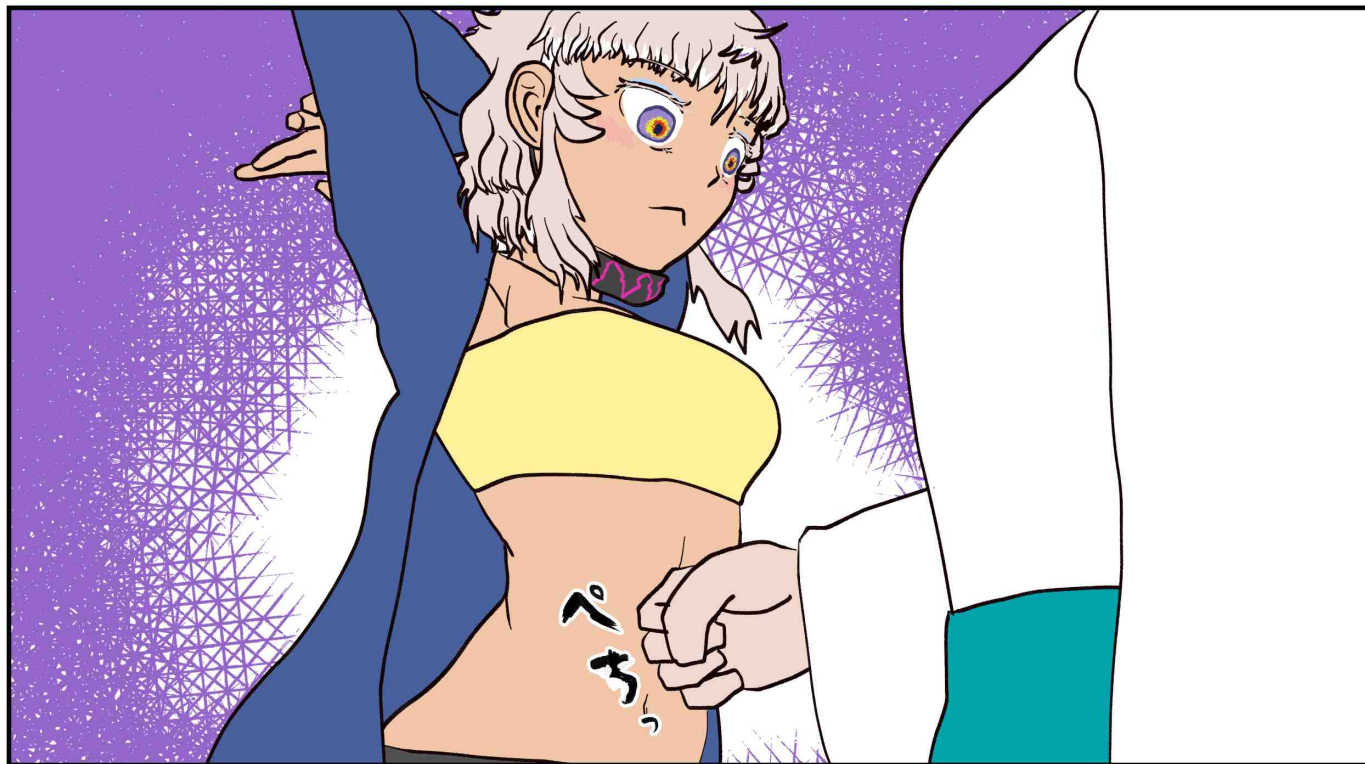
「しないしない！
あたしを
信じて！」

「というか…、
こんな狭いところで
出して大丈夫？」

「へーきよー
いつも狙ったところに
出せてるんだから」

「ええ…？
そうだったの…！？
まあそれなら…」

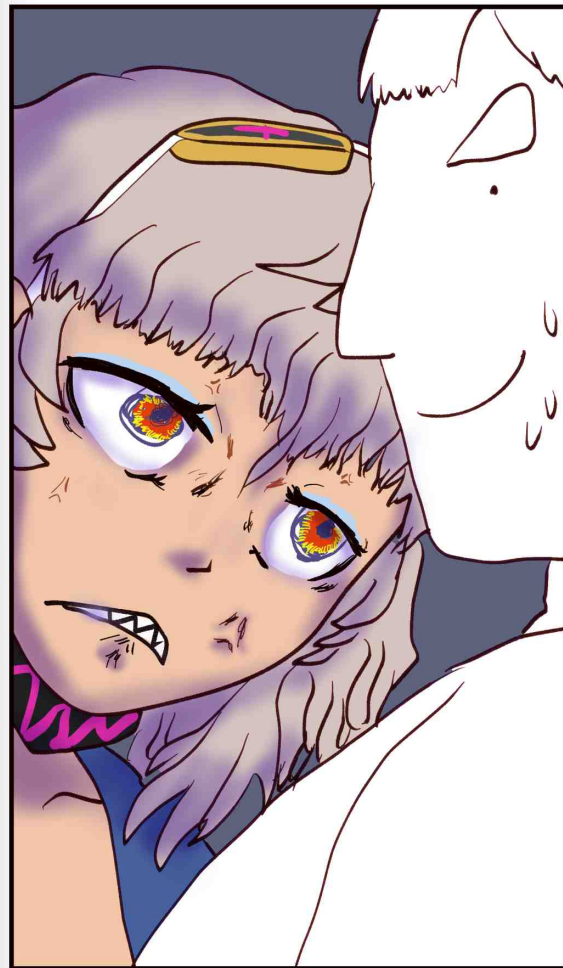
「わかった、
それじゃあ
いきますよ…」



「は???
?????
?????

やる気
あるの
?????
?????」

「すみません」



「あっ！
ごめん…！
また説明不足で…
へへ…」

こ…こわい。
ちょっと帰りたくなってきた。

「えっとね、
わりと強めに
やってもらわないと
でなくってさー」

「最近ね、鍛えてるし
大丈夫だから…
お願い！」

「それに去年まで
陸上部だったから！」

「は、はあ…
すごいね
陸上部…」

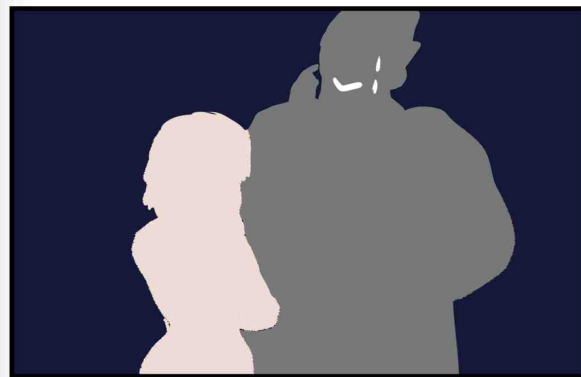
そうは言うがこの体格差だ。
武道の心得があるわけでもないが
躊躇するこっちの気持ちも
考えて欲しい…

とはまあ、言わないでおこう。

さっきからまた
翻弄されっぱなしだ。
やられっぱなしでは
いられない。

「よし…！
それじゃもう一度」

ススムは大きく息を吸った。

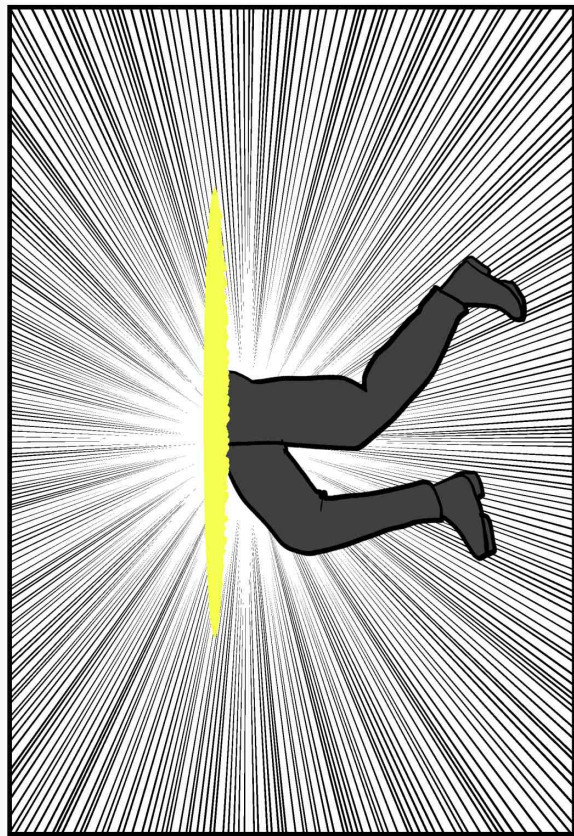


「失礼しまーす！
ご注文の…」



「うわー！？」

「ちょっ…えっ…
ええーっ！？
なんでそうなるの！？」



「もう！そんなところに
出すからじゃない！？」

「てっ、店員さん
来るとは
思ってたくて～」

「…ああ～っ！！
アタシの
パフェがー！」

「オマエか！」

「って、連れ戻さなきゃ！
行こうジェリーモン！」

ふたりは待ってて！
すぐ戻ってくるし！」

「いやいや
オレたちも行くよ！？」

「そうよ！パフェが！」

「バカ
パフェは忘れろ！」